様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　４月２１日現在

研究種目：基盤研究（Ａ）
研究期間：2007～2009
課題番号：19251010
研究課題名（和文）文化の世代間継承に関する文化人類学的研究：インドネシアの事例から

研究課題名（英文）Anthropological research on the inter-generational cultural succession: An Indonesian case study

研究代表者
鏡味　治也（KAGAMI HARUYA）
金沢大学・人間科学系・教授
研究者番号：20224339

研究成果の概要（和文）：
インドネシアを事例に、首都と地方と辺境、民族伝統の違い、都市部と農村部や男女の違いに注目しつつ文化継承の実態を組織的に調査しデータを収集した。教育の普及やメディアの発達、生業の変化が文化継承のあり方や継承されようとするものに変化をもたらしていることを確認し、首都や都市部では民族文化も国民文化化するいっぽう、地方や辺境では民族間関係により民族意識の先鋭化が顕著なことが把握され、とりわけライフコースの変化が文化継承のあり方を規定していることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：
During this research project, we collected the field data concerning the process and contents of generational succession of national and ethnic culture in Indonesia. We conducted systematic field research with paying attention to the situational differences between the capital and the periphery, urban area and village area, male and female cases, and ethnic differences. The data show the obvious changes of the process and contents of cultural succession, mainly because of the change of life course caused by the spread of national education and modern occupations and also by the increase of transmigration. We found that the transmitted ethnic cultural contents tend to be fitted into the national cultural scheme in the case of the capital and local urban area, while in the regional context the uniqueness of ethnic culture is deliberately highlighted.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	7,500,000	2,250,000	9,750,000
2008 年度	6,800,000	2,040,000	8,840,000
2009 年度	7,100,000	2,130,000	9,230,000
年度			
年度			
総　計	21,400,000	6,420,000	27,820,000

研究分野：文化人類学
科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学
キーワード：文化継承、世代間格差、国民文化、民族間関係、ライフコース

１．研究開始当初の背景

文化は世代間で継承されることを暗黙の前提にした概念でありながら、それが具体的にどのようなメカニズムで生じるかの理論や実証研究は文化人類学の領域でもいまだ十分ではない。いっぽうで近代化による家族形態や地域社会の変化が進み、また国民文化の意識的な植え付けも世界中の国々に広がるなど、文化継承の実態の解明は現代世界を把握する上で不可欠な課題となっている。

本研究はインドネシアを具体事例としてとりあげ、その国内複数の地域での民族文化の継承や国民文化の植え付けの実態を把握し、文化継承の仕組みにどのような要因が作用し、それによってどんな文化変化が世代間で生じるのかを、実証的に探究するものとして企画した。

２．研究の目的

文化人類学の領域における文化動態の研究は、民族文化に関しては伝統的に維持されてきた文化のありようとそれが近代化等の要因により変化する様子を、また国民文化に関してはそれが国内諸民族の文化をもとに生成する様子をとりあげ分析してきた。その双方のプロセスは、独立して進むものではなく、相互に連関しあいながら展開する過程である。本研究はそうした複線的な文化動態を、世代間の継承の観点から統合的に把握しようと試みたものである。

親の世代から子供の世代へ、どのような文化がどのような手だてを通じて継承されるのか。そこには維持されようとする民族文化もこれから築き上げようとされる国民文化もともに含まれ、親の意向や子供の意思のほか、国家施策やマスメディアの戦略など、さまざまな思惑が介在し、都市か田舎かという生活環境や生業形態、さらには国内他民族との民族間関係など、多様な背景が影響を与えていることが予想される。こうした種々の要因がどのような状況でどれほど作用するのかを、インドネシア国内の複数地域・複数民族の実態調査から検証して、今日的な文化継承のあり方とそこに作用する主要な要因を明らかにしようとするのが本研究の目的である。その解明は、生活様式の近代化が急速に進む中で、人々が「文化」に何を託そうとし、それによってどのような未来を切り開こうとしているのかを推測する手立てとなることが期待される。

３．研究の方法

本研究は、どういう文化がどのような機会にどんな手だてを通じて世代から世代へ継承され用としているのかを実地調査で把握・検証し、そこにどんな要因が作用しているかを分析考察しようとするものである。その要因には多様なものが考えられるため、本研究参加者をふたつのレベルで組織化した。ひとつは要因別の考察取りまとめ責任者制、もうひとつは調査対象民族の割り振りである。本研究参加者は、いずれもこれまでインドネシア諸地域でのじゅうぶんな調査経験と、それぞれの分野での研究実績を有しており、それにもとづいて責任分野と調査対象民族の割り振りを行った。

責任分野の割り振りは以下の通りである。

- 教育：鏡味
- メディア：中村
- 芸術・芸能：福岡・梅田
- 経済：中川
- 政治：岡本
- 言語・文化言説：森山
- ジェンダー：中谷
- 民族間関係：長津・金子

教育とメディアは今日の文化継承に深く関わる要素である。また正業形態や政治状況や当該地の民族間関係は継承される文化の選択に大きな影響を及ぼす。芸能や言語は文化の中でも独自の地位を占め、継承のあり方も個別の手だてを有している。そして文化継承のあり方は男女で異なることが予想される。こうした枠組みのもとで、各人にはそれぞれの分野での分析視点や資料収集方針を提示し、その作用要因の分析考察をリードしてもらった。

また調査対象民族と調査地の割り振りは以下の通りである。

- バリ州：鏡味・中村・梅田・中谷
- 西ジャワ州：森山・福岡・阿良田
- バンカ・ビリトゥン州：岡本
- ゴロンタロ州：岡本
- ランプン州：金子
- 東ヌサトゥンガラ州：中川
- 東ジャワ州：長津
- ジャカルタ市：鏡味・中谷

研究者の多いバリ人と西ジャワのスンダ人を重点的比較対象事例とし、新州設置で民族意識が形成されつつあるバンカ・ビリトゥン州やゴロンタロ州住民、多数の移民と共存するランプンの先住民、出稼ぎが生業に組み込まれつつある東ヌサトゥンガラ州のエンデ人、国家の境界領域で暮らす海洋民のサマ人を調査した。各地域の都市部と農村部の差異についても注意を払いデータを収集した。

参加各人間の研究指針の共有と収集資料の相互提供は、年度ごとの研究打ち合わせとメールでの情報交換を通じて行った。

４．研究成果

文化継承という統一視点のもとに、インドネシア各所での民族／国民文化の継承のあり方の豊富な観察・聞き取り資料を蓄積することができた。その一端は、参加各人の論文や著書等で随時発表されている。その中でまとまったものとしては、本研究分担者の森山が編集者のひとりとなり、鏡味も執筆に加わった森山・塩原編『多言語社会インドネシア』（2009）、やはり本研究分担者の長津が編集の一人となり、同じく中谷も執筆に加わった長津・加藤編『開発の社会史』（2010）などがある。前者は言語の側面から近年の文化状況・動態を扱っており、多少内容構成を変えてインドネシア語でも出版した。後者はとくにインドネシア辺境領域での文化社会動態を扱っている。

個別の論文や学会発表については数も多く、その内容紹介は省略する。本研究を踏まえた資料分析の方向性としては、生業の変化や政府の政策、州や県の再編による民族意識の高揚などによって、文化継承の機会や手だてが変化するとともに、継承される文化の中身も変化していることを指摘するもの、都市部への移住などによるライフコースの変化により、継承される民族文化も国民文化（の一部）化していることを明らかにするもの、政治状況や民族間接触がひじょうに意識的な文化継承のあり方を作り出していることを指摘するものなどがあげられる。

本研究全体の成果取りまとめとしては、現在参加各人から本研究での調査に基づく成果論文を収集中であり、『文化の世代間継承』という本科研課題に即した題名の研究論文集として出版することを計画している。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 22 件）
１．中川敏、「失敗した比較---監査と類化」、『国立民族学博物館調査報告』90 巻 (2010)、227—246、査読有
２．Okamoto Masaaki & Abdul Hamid, “Jawara in Power, 1998-2007”, *Indonesia* No. 86 (2008), 109-138,査読有
３．中川敏、「コスモスからピュシスへ–人類学的近代論の試み」、『文化人類学』72-4（2007）、466-484、査読有
４．中谷文美、「「わたしの布は誰のもの？」–インドネシア伝統染織の＜ファッション化＞をめぐって」、『社会人類学年俸』33 号（2007）、1-32、査読有
５．岡本正明、「自治体新設運動と青年のポリティクス–ゴロンタロ新州設立運動（1998 年～2000 年）に焦点をあてて」、『東南アジア研究』45-4（2007）、137-158、査読有
６．金子正徳、「アダット（慣習）とクブダヤアン（文化）：インドネシア・ランプン州プビアン人社会における婚姻儀礼の事例を中心として」、『文化人類学』72-1（2007）、1-20、査読有

〔学会発表〕（計 15 件）
１．中谷文美、「インドネシアの伝統染織を着ることと使うこと—「文化横断的消費」をめぐる考察」、日本文化人類学会第 43 回研究大会、2009 年 5 月 31 日、大阪国際交流センター（大阪市）
２．岡本正明、「インドネシア、4 度目の「正義」の時代：イスラーム主義政党の均衡と現実主義の政治」、東南アジア学会、2009 年 6 月 7 日、京都大学（京都市）

〔図書〕（計 31 件）
１．長津一史・加藤剛（編）、『開発の社会史——東南アジアにみるジェンダー・マイノリティ・境域の動態』、風響社（2010）、540 pp.
２．Mikihiro Moriyama & Manneke Budiman (eds.), *Geliat Bahasa Selaras Zaman*, Jakarta: PT Gramedia Pustaka Utama (2010), 423 pp.
３．森山幹弘・塩原朝子編著、『多言語社会インドネシア』、めこん（2009）、323 pp.

６．研究組織
(1)研究代表者
鏡味　治也（KAGAMI HARUYA）
金沢大学・人間科学系・教授
研究者番号：20224339

(2)研究分担者
中川　敏（NAKAGAWA SATOSHI）
大阪大学・人間科学研究科・教授
研究者番号：60175487

中村　潔（NAKAMURA KIYOSHI）
新潟大学・人文学部・教授
研究者番号：60217841

福岡　正太（HUKUOKA SHOUTA）
国立民族学博物館・文化資源研究センター・准教授
研究者番号：70270494

梅田　英春（UMEDA HIDEHARU）
沖縄県立芸術大学・音楽学部・准教授
研究者番号：40316203

中谷　文美（NAKATANI AYAMI）
岡山大学・社会文化科学研究科・准教授
研究者番号：90288697

森山　幹弘（MORIYAMA MIKIHIRO）
南山大学・外国語学部・教授
研究者番号：50298494

長津　一史（NAGATSU KAZUFUMI）
東洋大学・社会学部・准教授
研究者番号：20324676

岡本　正明（OKAMOTO MASAAKI）
京都大学・東南アジア研究所・准教授
研究者番号：90372549

金子　正徳（KANEKO MASANORI）
国立民族学博物館・研究戦略センター・外来研究員
研究者番号：50435541

(3)研究協力者
阿良田　麻里子（ARATA MARIKO）
国立民族学博物館・外来研究員